

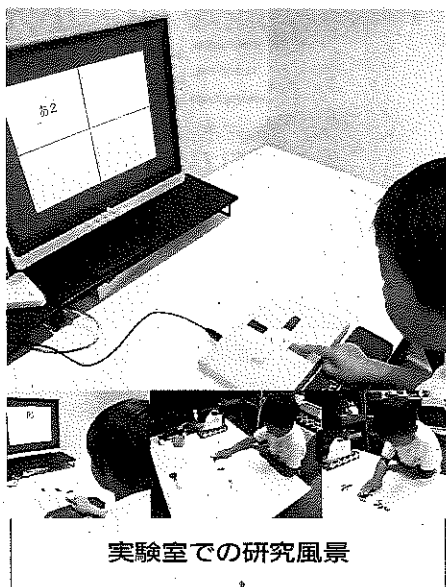
地域と学ぶ

山形大学地域教育文化学部

「もう少し頑張っていたら……」「あの時こうしていれば……」。人生において、私たちは常に「たられば」にとらわれて生きている。状況に応じて正しい判断をし、適切な行動を選択して上手に生きるためにはどうすればよいだろうか。

その答えとなり得るのが「実行機能」だ。聞き慣れない言葉だが、神経科学の領域で生まれたこの言葉は、今や教育の領域でもホットなキーワードとなっている。実行機能とは、将来の目標を達成するために、現在の行動を効率よく遂行するために必要な認知能力を指す。セルフコントロールの基盤にもなっている能力で、未来を拓(ひら)く「心をコントロールする力」とも言える。脳の前頭前野がその役割を果たし、成長

認知神経科学 大村 一史 准教授



実験室での研究風景



▽1973年生まれ、
静岡県出身。山形大着任
は2006年。

実行機能、適切に伸ばす

とともに発達する。これまでの研究から、知的能力そのものよりも、学力や社会適応力と強く関係していることが分かってきた。知的障害や発達障害のある子どもたちは、この実行機能が弱く、自発的に効率よく活用することが苦手だと考えられている。

子どもたちが実行機能を適切に伸ばすことは、将来の研究成果を、実際の教育現場に活用していくことが地域教育におけるミッションだ。

研究室では、実行機能研究の視点から、実験室で行う基礎研究とともに、学習や社会適応に困難を抱える子どもたちに対する指導も行っている。従来の教科指導とは異なる、基礎的な科学研究に裏打ちされた新しいタイプの指導法だ。科学

大村研究室では、心理行動実験、脳機能計測を活用した実行機能のメカニズム解明と、研究成果を生かした教育支援の実践に挑んでいる。実験室で得られた研究成果を、実際の教育現場

的な知見に基づいた指導を適切に積み重ねれば、子どもたちの力は、着実に高まっていく。

教育においてはすぐに役立つことが求められがちだが、コツコツと地道な努力が成功への一番の近道となる。研究室の学生たちが教師として巣立ち、研究生活で培った科学的思考力を子どもたちに還元していくことが、大学(研究室)と地域(教室)を結ぶ一つのカギとなるはずだ。

11月1日掲載します